

1860年に世間から相手にされなかった戯れ言の今日的価値

政策・メディア研究科特任教授 村上恭一

リーマンショック、東日本大震災と経済的にも物理的にも大打撃が続いています。こう言うときだからこそ古典を振り返り、その再評価をしてみたいと思います。と言うのも、リーマンショックは、自由主義(libertarianism)の限界を、東日本大震災は功利主義(Utilitarianism)の限界を露呈したと思うからです。そして、これらの事件は同時にコミュニタリアニズム(communitarianism)台頭の契機ともなっていると思います。

さて本題に入りましょう。私は秋学期担当の一つとして「企業の社会的責任(CSR)」と「プロフェッショナル・エシックス」の講義を担当しています。そこで、CSRと倫理哲学の観点から、今日の労働と賃金のことについて考えたいと思います。

CSRについて私の知る限り最も古い書物の言葉は、1860年の「経営者は実は大変な仕事である。社会の資源を信託されていて、それを損なうことなくより大きな成果にして社会に還元するという、最も難しい仕事を担う立場にある」「労働者を雇うとは意味ある仕事を与えてなければならぬということである」です。この社会的責任において、「賃金はなぜ支払われるのか？」と問われたら、あなたはへと答えますか。「賃金は労働への対価や報酬ではなくて、本来は、労働者の潜在能力を開花させるための投資である。」と喝破した学者がいます。彼の名はジョン・ラスキン(John Ruskin)¹。彼は、「労働者の潜在能力を開花させるために、企業内で働く時間と、生活時間に配分するかを決めるために、両者が話し合いで決めれば良い。」そして、労働者は「人間は本質的に労働をも楽しむものである」と考えていました。経営者の責任は「軍艦の艦長が、難破のときに最後まで彼の艦にふみとどまり、また飢餓にさいしては最後のパンを水兵と分けあわなければならないように、製造業者はどんな商業上の恐慌あるいは危難にさいしても、その苦痛をかれの職工とともにうけなければならない。職工たちが感ずるよりも、より多く自分でこの苦痛をおわなければならない」とまで指摘しました。「雇用者と労働者の正しい関係と、両者のすべての最善の利益とは、結局・・・正義と情愛によるものである。富を生み出す人間を動かすのは、必ずしも貨幣や物質的財産ではなく、道徳的な力である。」とまで。

彼の思想は、企業の社会的責任(CSR)やワークライフインテグレーションにも通じる思想の近

¹ ラスキンについての出典：「この最後の者にも」『世界の名著 41 ラスキン モリス』中央公論社、1971年

代における原点を見ることができると思います。

UNTO THIS LAST 『この最後のものに』と功利主義・自由至上主義の思想

ラスキンのこの論文名は UNTO THIS LAST。Corn-hill Magazine に発表したのが 1860 年。その内容は、アダム・スミス、ミル、リカードらの功利主義・自由至上主義(libertarianism)の経済思想を激しく攻撃し、論文の冒頭で「近世のポリティカル・エコノミーという自称の科学は社会的活動についての有利な規則が、社会的情愛の力とは無関係に決定されうるという考えにもとづいているものである」と批判しました。結果、当時、功利主義が主流で自由至上主義風潮の中で強い批判を受け、Corn-hill Magazine は論文の掲載を 4 回で打ち切りました。その後ラスキンは 1862 年に本として完成させ出版しています。論文の題から察することができるように聖書と密接に結びついたこの論文が英国で受け容れられなかったのは思想のパラダイムの対立からです。そこでまず聖書の内容から振り返ってみましょう。UNTO THIS LAST はマタイによる福音書 20 章-14 「自分の賃銀をもらって行きなさい。わたしは、この最後の者にもあなたと同様に払ってやりたいのだ。」が出典です。朝から一日働いた者と夕方から働いた者の賃金が同一。このことについてあなたはどのように思いますか。もし、この賃金の支払い方がおかしいと考えるのであれば、功利主義あるいは自由至上主義の思想に基づいていると考えられます。しかし、もし夕方にきた者には夕方にしか来られない事情があるとしたらどうでしょうか。

近代の経済学、特に新古典派の経済学とそれを先鋭化し実践したのが米国です。「1930 年代以降のニューディール政策がもたらした過度の個人主義化。それを支えるリベラリズムというイデオロギーや自己利益追求の正当化を核とする社会科学では、効用や利潤の極大化を追求する利己的な個人を理論の中核に置く新古典派や、利己的な主体間の相互作用にのみ光を当てたゲーム理論を普遍的パラダイムとみなす動向さえみえます。」²この思想が根幹となる社会では、努力や成果と関係のない賃金の支払い方は不正義と考えられ、ラスキンに対する批判には正当性があると言えます。

ラスキンの思想と今日

さて、功利主義や自由至上主義には合致せず、世間から失笑どころか強い批判を浴びた UNTO THIS LAST はこの後どのような展開を見せるのでしょうか。ラスキンの思想を柱としたのがマハトマ・ガンジーです。ガンジーは 1904 年 3 月にこの本と出会い 1908 年に Sarvodaya (“well

² ベラー他『心の習慣』みすず書房 1991 年。山脇直司『公共哲学とは何か』ちくま新書

being of all”)というタイトルでこの本を翻訳します。ガンジーの「私は、『最大多数の最大幸福』、『適者生存』という原理を信じません。人にとっての規定は、『すべてのものの幸福』、『すべてのものの発展』であり、『弱者優先』です」³との考えからも、反功利主義・反自由至上主義経済とラスキンの思想を継承していることが分かります。1998年にノーベル経済学賞を受賞したインド出身の経済学者アマルティア・セン(Amartya Sen)は、さまざまな可能な生の間を選択を行っていくことをケーパビリティ(capability)と呼びました。ケーパビリティは人間のさまざまな活動や状態を実現していく自由や能力を意味します。このケーパビリティ概念は人材開発の核概念として国連開発計画 (UNDP) にも大きな影響を与えました。センがラスキンから影響を受けていたのかについて直接書かれた文献を私は知りません。しかし、人々の潜在能力を开花させるとすることを重視することにおいて、ラスキンとセンには共通点があると私は思います。

日本の今日とラスキンとの関係

ラスキン・ガンジー・センらを哲学としてみると普遍的な共通善を目指していたと考えられます。共通善というアリストテレスの概念を強調するのがコミュニタリアニズムであり、この概念を今日再評価したのがマイケル・サンデル (Michael J. Sandel) です。サンデルは「中国に抜かれてもたじろぐな GDPより生活の質」と震災前の日本にエールを送っています⁴。日本の経済学者、都留重人はラスキンの主張を紹介しながら「大事なのはアウトプット(GNP)よりは、インプット(労働)のあり方である」主張しています⁵。「労働というのは『投入』ですけれども、『犠牲』ではなく、『プラスの作業』であるというべき段階が生まれているのです。『プラスの作業』というのは、働く人にとっては張り合いのある仕事だということになる。われわれ働くものが、働きがいを求めるというものになりうる可能性が現在できつつある。」⁶と述べ労働のあり方を見直すように問いかけています。

さて、日本における雇用と賃金の関係は今後どうなるのでしょうか。古典の叢知を借りて推測してみたいと思います。近江商人の「三方良し」や、朱子学を基本とした懐徳堂四書、石門心学などの教えは、大分類ではコミュニタリアニズムの考えに類するものでラスキンの考えに近いところがあります。これらの教えは庶民にも理解できるように上方落語にも活かされています。

³ LETTER TO PREMABEHN KANTAK July 6, 1932

⁴ 東京新聞 2011年1月16日

⁵ 都留重人『『成長』ではなく『労働の人間化』を』『世界』岩波書店 1994年4月号

⁶ 都留重人『科学的ヒューマニズムを求めて』新日本出版社 1998年

ます。演じるのに高度な芸が必要と言われる「百年目」に今後の日本のあり方が示されているように思われます。百年目には、丁稚や手代には酷でありながら自分は茶屋遊びに興じている番頭を親旦那が諭す場面があります。その台詞は、今日非正規雇用が3割を超えまもなく5割に達しその給与水準が極めて低いという統計が発表される中、今の社会のあり方と今後の展開を予想しているように思われます。その台詞は「梅檀はなんえん草を肥やしにして生き、なんえん草は梅檀の下ろす露で繁殖する。なんえん草が枯れれば梅檀も枯れる。店ではおまえさんが梅檀で、若い者がなんえん草。自分の働きで得たものは露の雫のように下にも垂らせてあげなさい。下が枯れれば、上も枯れる。」です。

「賃金は能力を開花させるための投資」と喝破したラスキンやその思想を引き継いだ流れと今日の雇用環境とその未来。企業の社会的責任とは。プロフェッショナル・エシックスとは。こういう時代だからこそ、秋の夜長に古典の叢知に耳を傾けてみるのはいかがでしょうか。